宮沢賢治の鳥たち

国松俊英

野鳥観察をはじめて二十年になる。

鳥を見るのが好きだ。暇があれば望遠鏡と図鑑を持って出かけていく。山にも川にも、海べにも、都会のビル街にでも、鳥はどんなところにもいる。春には春の鳥が、秋には秋の鳥がいて、一年中あきることがない。

はじめのころは、自然の中の野鳥観察だけを楽しんでいた。それが、鳥はどんなところにもいるのに気がついて、興味が広がった。鳥は絵画の中にも、映画の中にも、小説の中にも、俳句の中にも、音楽の中にもいるのである。古い本を読んでいくと、昔の人が生活の面でも文化の面でも、宗教の面でも、鳥たちと深く結びつき、関わり合いながら暮らしていたことがわかって、さらに鳥のことを学ぶのがおもしろくなった。

宮沢賢治の作品についてもそうだ。むかしは考えもしなかったのに、いつか作品に出てくる〈鳥〉について、気にかけながら読むようになっていた。賢治の童話や詩には、どんな鳥が登場するか、作品の中でそれらの鳥はどのように書かれ、どんな役割を果たしているか。そして、賢治は自然の中で鳥たちをどのように見ていたのか。

賢治の童話や詩には、一五〇種以上の動物が出てくる。一人の作家の作品に登場する動物が一五〇種以上というのは、他にあまり例がないといわれる。登場する動物の中でも、鳥はとても多い。山や森へ行っても夜行性であるけもの・哺乳類には、なかなか出会うことはできない。その点、鳥類は数も多いし、人里でも季節を問わずかんたんに見られる。

賢治にとっても、動物の中で鳥はいちばん親しいものだったのだ。

「よだかの星」、「雁の童子」、「鳥の北斗七星」、「二十六夜」、「林の底」、「鳥をとるやなぎ」、「まなづるとダーリヤ」……。このように、鳥が主人公であったり、鳥が重要な役目を持たされている作品は、すぐにいくつも上げることができる。賢治自身も「花鳥童話集」とか「花鳥図譜」と名づけているくらいである。ところが、賢治作品の鳥たちについて書いた本は一冊もないし、作品の中の鳥についての研究論文やエッセイなども、数えるほどしかない。バードウォッチャーで賢治が好きな人はたくさんいるはずなのに、ふしぎなことである。

〈鳥〉を通して賢治の作品を読んでいくと、童話や詩がこれまでとは異なった顔つきをすることに気がついた。前に読んだのとはまったく異なった読み方ができて、すごくおもしろくなってきた。

たとえば、「よだかの星」という童話がある。初期作品群の中のひとつと推定されている。この作品の中心主題を描くためには、ヨタカほどふさわしい鳥はいないと思われる。この作品は生前未発表であり、草稿の初題は「よだか」となっていた。しかし賢治は、表紙の題名「よだか」を消して、「ぶとしぎ」もいう題名に変えているのである。ぶとしぎとは、ヨタカとは形も生態もぜんぜん異なる〈オオジシギ〉という鳥の方言名である。

オオジシギは、夏鳥としてオーストラリアなど北の国から日本に渡ってきて、本州の中部以北の高原と北海道に生息する。とくに北海道に多く見られるが、岩手県の岩手山山麓の草原などにも生息する。

賢治は、どうして「よだか」という題名を消して、「ぶとしぎ」つまりオオジシギという鳥の名を書いたのだろう？　その疑問を解くヒントになるものが、アイヌの民話にあった。アイヌの民話の中に、オオジシギにまつわるものがあった。その話では、オオジシギは〈天の鳥〉とされていたのである。

アイヌの民話のストーリーはこのようなものだ。

――ある時オオジシギは、天の神様から仕事をいいつかって地上に下りてきた。下りたところは花が一面に咲く春の草原で、オオジシギはつい仕事を忘れ、遊びほうけてしまう。はっと気がつくと、もう何日もたっている。オオジシギはあわてて仕事をすませ、自分の名を呼びながら天に戻っていく。

けれど神様は「お前は仕事を忘れて、遊んでばかりいた。もう天に戻ることはならぬ」と怒っていい渡したのだ。オオジンギは天の国が忘れられず、神様の元に帰りたい。それで、いまでも大声で自分の名を告げながら、天をめざして空高く舞い上がっていくことを繰り返しているのである。――

帰還を許してもらえないのに、いまも神様に許しを乞いながら、天にむかって空しい飛翔をつづけている。賢治は、オオジシギの哀しい習性に、強く共感したのではないか。

賢治は、ヨタカを主人公にして作品を一度は書いた。けれどそれは気にいらなかった。そして作品の鳥を、ぶとしぎ・オオジシギに変えて、童話を書き改めようとしていたと思われる。〈天に還る〉は、賢治童話の主題のひとつでもあったのだから。

この仮説をもっと説得力あるものにするためには、賢治がアイヌの民話をどの程度広く読んでいたか、オオジシギをどの程度観察して知っていたかなど、調べなければいけないことがある。けれど、楽しみながら少しずつやっていこうと思っている。

一九九四年の初夏と秋には、賢治が作品の舞台にした盛岡市周辺や花巻へ、バードウォッチングに出かけた。賢治の童話や話に登場するいくつかの鳥たちに会うことができ、収穫があった。これからも時間を見つけて、山や森や草原を歩いて見ようと思っている。賢治が生きていた時代の環境とはすっかり変わってしまっている。けれど、イーハートーボの風や光をじかに肌に感じることで、賢治の鳥を探るヒントがつかめるのでは、と考えているのである。